平成２９年度第１回
西宮市立こども未来センター運営審議会

資料集

平成 29 年5月 29 日（月）14：30～

於：西宮市立こども未来センター　会議室

目次

【資料１】

平成 28 年度第２回
西宮市立こども未来センター運営審議会審議等のまとめ・・・・・・１

【資料２】

議事１　前回審議会での意見・要望について・・・・・・・・・・・・４

【資料３】

議事２　こども未来センターの課題について・・・・・・・・・・・・９

資料１

平成 28 年度第２回　西宮市立こども未来センター運営審議会　審議等のまとめ

報　告
（１）平成 28 年度各種事業の進捗状況について

議　事
（１）前回審議会での意見・要望について
（２）こども未来センターの課題について

資料「こども未来センター業務実施の概要」、「こども未来センターの役割と支援の流れ」などについて事務局より説明したところ、各委員から主なものとして以下の意見・要望が出された。

【相談利用件数】

①利用件数の報告について、結果論の説明はあったが、予測より多かったのか、少なかったのか、結果の数字に対しての見通しについて、教えてもらいたい。

②電話相談について、アウトリーチするから減るのか、来る者は来いという姿勢でするのとでは、大きな違いがある。将来アウトリーチすればするほど、入口の相談機能は、減るだろうと踏むのであれば、当事者が色んな人たちに向って伝播する力を持たないといけない。もう少し、入口は広げてもいいのではないか。相談はどんどん増えてもよい。また、アウトリーチするためのスタッフが必要だという形も良いのではないか。

【親同士のネットワーク】
①子供に障害があるお母さんは、不安とショックで悲観されるが、わかば園のように同じ人たちがいる安心感がある中で、覚悟する部分と最終的に子供を育てるということが、こども未来センターの中で、子供自身が自分の相談もできるということになってくると、入口がものすごい広がりがある。入口の部分を無制限に、子供の未来に対して皆で見ていく受け皿を広く、ネットワークを張っていただきたい。

②障害のある子供を取り巻く周辺の人達に対するケアについて、不安をお持ちの人たちが話し合いの場に参加できるようなチームを組むなど、アウトリーチでなくてもいいが、こども未来センターの活動のなかに保護者、障害をお持ちのお父さんなりファミリーとして訪問にいくなり、ここを活用している人たちを上手く使い、未来センターが保護者も一緒になっての支援者である。 だからこそ、個別の支援計画の中に家族も入ってくださいということが言えるのだという言い方を是非、やっていただきたい。保護者の支援者をプールできる新しい機能みたいなものを一つの場として作り上げていってほしい。

【広報・啓発】
①正しい発達障害に関する知識がなく、情報過多になりすぎていて、自分の目でみることができていない。専門的な知識の向上も必要だが、もっと平たく、一般市民に分かりやすい言葉での情報提供が必要。

②発達障害について、詳しいことを知らない人たちへの啓発機能を未来センターが担って欲しい。

③啓発、調査、研究事業の攻めの部分がまだまだできていない。直接支援あるいは、今ある課題対応するところになっていて、そこにはまだ追いついていない。

【医療的ケア】
①重度心身障害児や医療的ケアの子供達について受入れを行っているノウハウもあるということだが、それをどうやって、地域の保育所、あるいは仕組みを広げて、どの子も地域の保育所や幼稚園で受け入れてもらえるようになるのか。

②この仕組み作りについては、もちろん未来センターだけが担うものではなくて、自立支援協議会こども部会などで、地域の色んな関係機関の方々と一緒に考えるべきものではあるが、具体的には、例えばノウハウの手引き集であるとか、支援と手立てについて、あるいは、気づきと手立てについてのノウハウ集を配って、まず知識や啓発、情報の共有、研修の一助としていただきたい。

③今の体制では、これから新しく事業を企画して、先駆的に取り組みを考えていくには、人員が足りないのではと思う。一市民としては非常に期待しているので、体制の充実についても今後検討していただきたい。

【診療待ち時間】
①診療待ち時間について、急に増えたという訳ではなく、もう何十年もこういう状態で、増員してもそれ以上に発達障害の数がふえている。この状態というのは数年ずっと変わらない。これを何とかしないといけない。

【地域支援】
①地域支援の強化、地域連携について、能力をフルに活用して直接支援というのが非常に多い印象。もう少し地域の事業所との連携や保育所等訪問支援などというアウトリーチの機能を促進させるような仕組み作りが、底支えということになると思う。

【学校園支援】
①学校園支援の定期訪問について、学校の先生方が困っている実情を踏まえて、どういう支援が必要なのか、それを学校として、どう捉えていくのか。
　また、学校から家に帰るまでに、育成センターに行く子供が増えているので、そこを連携でつなぎとめていくような関係機関、育成センターの指導員や学校の先生だけではなく、同じ目線で同じ視点の中で、子供を支援していっていただきたい。
　定期訪問は、すごく大事だと思うので、回数に限るがあると思うが、こども未来センターの大きな役割のひとつだと思うのでよろしくお願いしたい。

②学校現場で、情報の共有化が図れていない。あくまでも一つのケースの情報が学校にあるだけになっている。先生方が、課題を見つけて共通理解し、解決方法を話し合い、実践していく、という体制になるようにアドバイスしてほしい。先生方と一緒になって、課題の見つけ方、実践の方法を協議し、必ず学校の中で、その情報を共有化していくような体制に持っていくのも一つの手かなと考えている。

【未来センターの役割】
①拠点型整備をすると、機能をどんどん入れていったらいいが、西宮市の人口 48 万人の中で、この１ヶ所で全部支えていくのは到底無理となった時に、コアとしての役割をどう持つか、学校が自立できるような支援をどうするのか。
②西宮はデイサービスが増えてきて、専門性というところで、アウトリーチ的な専門家を派遣して欲しい。
③西児連（西宮児童通所支援連絡会）は、センターと同じ児童発達支援事業をやっているが、そういったつながりのなかで、出先機関的な意味合いを持つような役割になれないかと思っている。
④放課後等児童デイサービスに、国が保育所等訪問支援、地域支援をしなさいと、巡回的な役割の仕事が増え、放課後等児童デイサービスの質を上げるのは大事だが、周りの機能も上げていくことによって、結果的には、多くの学校に行ける専門家を増やしていける。真剣に一緒にやっていきたいと考えている。

資料２

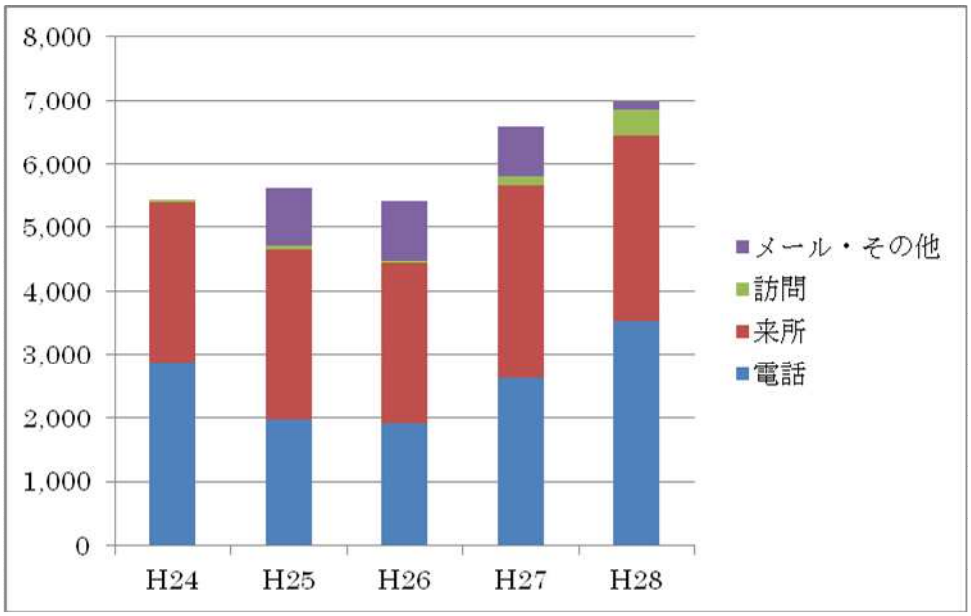
議事１　前回審議会での意見・要望について

１　相談支援について

意見要望等

（１）相談利用件数の増加についての今後の見通しをどう考えているのか。
（２）アウトリーチをすることによって相談を減らすのか、すべて受け入れるのか。相談窓口を広げることによって、相談が増えてもよいのではないか。
（３）アウトリーチのスタッフが必要であれば、増やしてもよいのではないか。

【相談件数の推移について】



今後の取組・方向性

・相談があれば、内容を確認し、こども未来センターのサービスにつなぐか、他の機関につなぐかを判断しており、一義的には全ての相談を受けることとなる。

・相談件数については、こども未来センターの存在が認知されるに従い、今後とも一定数の増加が見込まれると考えている。

・アウトリーチについては、受け皿としての地域における量的な拡大及び質の向上を目的としており、今後とも可能なかぎり実施していきたい。

２　保護者支援について

意見要望等

障害のある子供をもつ保護者などに対するケアについて、保護者同士のネットワークを活用するなどして、保護者の支援者をプールできる新しい機能を作り上げてほしい。

【現状】

・通園療育部門では保護者会「わかば会」、あすなろ学級の「親の会」などが活動している。

・旧わかば園でも保護者同士が気軽に話せる交流の場の開催支援などを行っていた。

今後の取組・方向性

・センターの設置目的に合致する事業については、会議室の使用を認めており、保護者同士の自主的な交流会や研修、イベントの開催について、会場の提供を行う。

・保護者が気軽に話せる交流イベントや、保護者会の OB との懇話会などの実施に取り組む。

・こども未来センター１階のサロンを活用し、関係団体による保護者への相談の場を設けるなど、支援の充実を図っていきたい。

３　広報・啓発等について

意見要望等

①正しい発達障害に関する知識がなく、情報過多になりすぎていて、自分の目でみることができていない。一般市民に分かりやすい言葉での情報提供が必要。
②発達障害について、詳しいことを知らない人たちへの啓発機能を未来センターが担って欲しい。
③啓発、調査、研究事業が進んでいない。

【現状】

こども未来センターでは、専門職向けの講座だけでなく、発達障害のある就学前児の保護者を対象とした発達障害の学習を行っている。

（平成２８年度　年２回開催　参加者数４２人）

今後の取組・方向性

・こども未来センターの利用者に限らず、発達障害等について、あるいはこども未来センターの利用方法などについて、一般市民の方に広く理解していただけるよう、イラストなどを使ったわかりやすいパンフレットを市内大学と連携協力し、平成２９年度中に作成する予定。

さらに、ホームページやスマートフォンなど、ＩＣＴによる情報発信にも努める。

・現在、発達障害等の理解を深める一般市民向けの講座の開催について、検討している。

・調査・研究については、本市が加盟している「近畿肢体不自由児療育施設連絡協議会（近肢連）」などとも連携し取り組んでいきたい。

４　医療的ケア、重度心身障害児の受入について

意見要望等

①重度心身障害児や医療的ケアの子供の受入れについてのノウハウを地域の保育所や幼稚園に広げるために、手引き集を作成するなど、知識や啓発、情報の共有、研修の一助としていただきたい。
②先駆的に取り組みを考えていくために、体制の充実を図っていただきたい。

【現状】

こども未来センターの診療所は、すべての障害児の訓練等の受入を行っている。西宮児童通所支援連絡会（西児連）の会議にも職員が出席し、関係団体等との情報共有にも努めている。

また、こども未来センターの通所支援部門である「わかば園（児童発達支援センター）」においても、医療的ケアを必要とする児童の受入を行っており、保育面での多くのノウハウを有している。（平成 28 年度　園児３８名中　医療的ケアが必要な園児は９名）

なお、保育士のアウトリーチについては、課題とは認識していたが、平成 28 年度は人員が充足せず、十分な体制がとれなかった。

今後の取組・方向性

・平成 29 年度は、保育士を増員し、地域支援へ向け体制の整備を推進する。

・「わかば園」を退園し、地域の保育所・幼稚園等に通う児童への支援を足がかりに保育士のアウトリーチを進めていく。

・保育所、幼稚園及び児童発達支援事業所に向け「わかば園」の療育公開日や、今年度事務局をつとめる「精神発達運動研究会」の場を活用し、保育面のノウハウについて情報提供や情報交換できる場を設ける。

・医療的ケアが必要な子供への対応のノウハウについては、こども未来センターにおいて保育所や幼稚園、小学校、中学校の教諭等を対象としたセミナーを開催し資質の向上を図っているが、今後とも内容の充実に努めていきたい。

５　こども未来センターの役割について

意見要望等

①人口 48 万人の中で、この１ヶ所で全部支えていくのは到底無理となった時に、コアとしての役割をどう持つのか、学校が自立できるような支援をどうするのか。

②増加しているデイサービスの専門性向上のために、アウトリーチ的な専門家を派遣して欲しい。

【こども未来センターの支援コンセプト】

◎必要に応じた支援の実施

◎「つなぎ」の強化

◎「専門性」の強化

◎学校園・地域の支援力の育成

今後の取組・方向性

こども未来センターは、センターに来所される方のほか、地域における支援を受けながら社会性の発達・向上を図っていくことを前提に整備の検討をしてきた。

今後は、このようなシステムの本格的な稼動を目指し、教職員へのスキルアップのための研修や各種セミナー、放課後等デイサービスなどへの研修、アウトリーチを進めていく。

資料３

議事２　こども未来センターの課題について

課題　①　診療待ち期間の短縮

医師増員により初診件数は大幅に増加し、診療希望と均衡できた。
今後は待ち期間を短縮させつつ、不安解消につながる支援が課題。

【28 年度の取組】

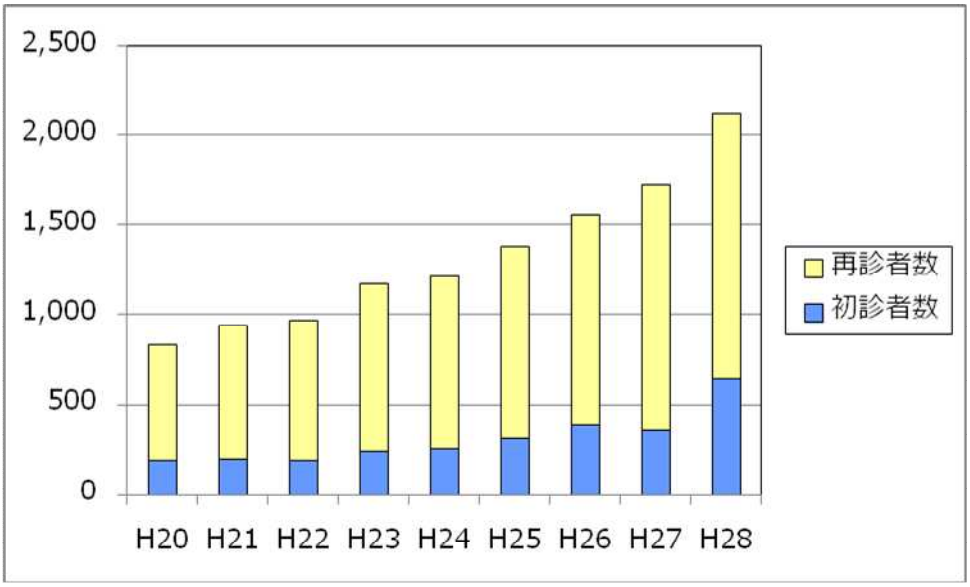
１．人員体制の強化

職種	増員数	計
医師	1	１１（応援医師含む）
言語聴覚士	1	6
作業療法士	2	5
心理療法士	1	3
メディカル・クラーク	1	1

メディカルクラークの導入により、医師の医療事務の負担軽減が図られており、診療効率の向上につながっている。

【現状と課題】

１．診療件数の推移



医師の増員など、診療体制の強化・充実に取り組んだ結果、初診件数は大幅に増加し、診療希望と均衡できた。今後は待ち期間を短縮させつつ、不安解消につながる支援が課題となっている。

２．診療待ち期間

	H29．３現在
発達障害	５．７月
肢体不自由	０．４月

医師の増員等により診療体制の充実は図れたが、診療希望者が増加したことにより、発達障害にかかる受診については、６か月程度の診療待ちとなっている。

【今後の取組・方向性】

１．人員体制の強化（平成 29 年度）

職種	増員数	計
医師	１	１２
言語聴覚士	１（予定）	７
メディカル・クラーク	１（予定）	２

２．保護者支援

こども未来センターの相談を受けられた後、初診までの間の待機期間に、発達の遅れを疑う子供と支援が必要な保護者を対象に行います。

（１）ペアレント・プログラム

子育てに難しさを感じる保護者が子供の行動の理解の仕方を学び、楽しく子育てをする自信をつけることや子育ての仲間を見つけることを目的としています。

【対象】３歳児～年長児又は小学生の子供との関わりに不安を感じている保護者
【定員】定員 10 名
【内容】全７回のプログラム（別紙　チラシ参照）　年２回クール実施

（２）ほっこり広場

初診までの待機期間において、保護者の不安を和らげ、集団で手遊びやふれあい遊び、紙芝居など遊びを通して親と子の関わりを深めることにより、子供の発達を促す。

【対象】０～２歳児で、保育所、幼稚園、児童発達支援事業所などに通っていない子供と保護者
【回数】月２回　　９時 45 分～11 時 00 分

課題　②　早期発見の強化

他の数値指標が全体的に向上する中、０～１歳児に関する相談人数は、従来と変わらない傾向が続いている。

これは、現行のスクリーニングにおける限界の可能性もある。今後「かおテレビ」の活用や、幼稚園・保育所との情報共有や連携について検討をしていく必要がある。

【28 年度の取組】

１．人員体制の強化

職種	増員数	計
保健師	1	1

保健師を配置し、乳幼児健康診査とのつなぎの強化に努めた。

２．かおテレビ（視線計測装置）の導入

（１）塩瀬・山口地区で行われている１歳６か月健診に併設する会場で「かおテレビ」事業を実施し、地域保健課と結果の情報共有を行った。

会場	回数	実施人数	アンケート回答者数（率）
塩瀬公民館	３回	30 人	26 人（86.7%）
山口保健福祉センター	４回	38 人	29 人（76.3%）
計	７回	68 人	55 人（80.9%）

※兄弟児６人を含む

（２）アンケートの実施

Ｑ１　楽しくできたか

Ｑ２　注目させるのが大変だったか

Ｑ３　検査の目的や内容は理解できたか

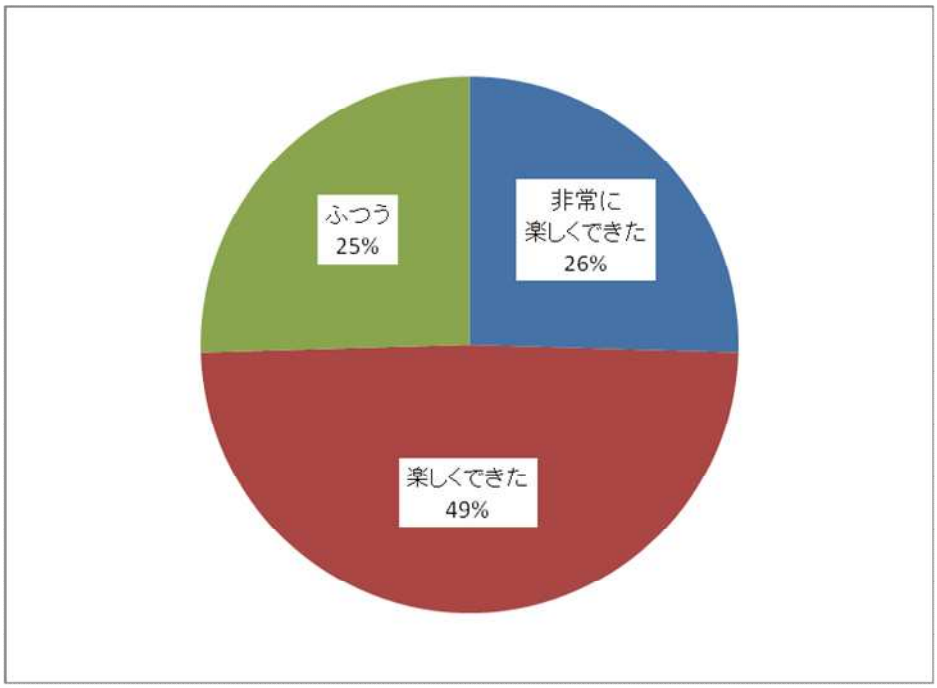
Ｑ４　社会性を理解するのに役立つと感じたか

３．かおテレビオペレーターの養成

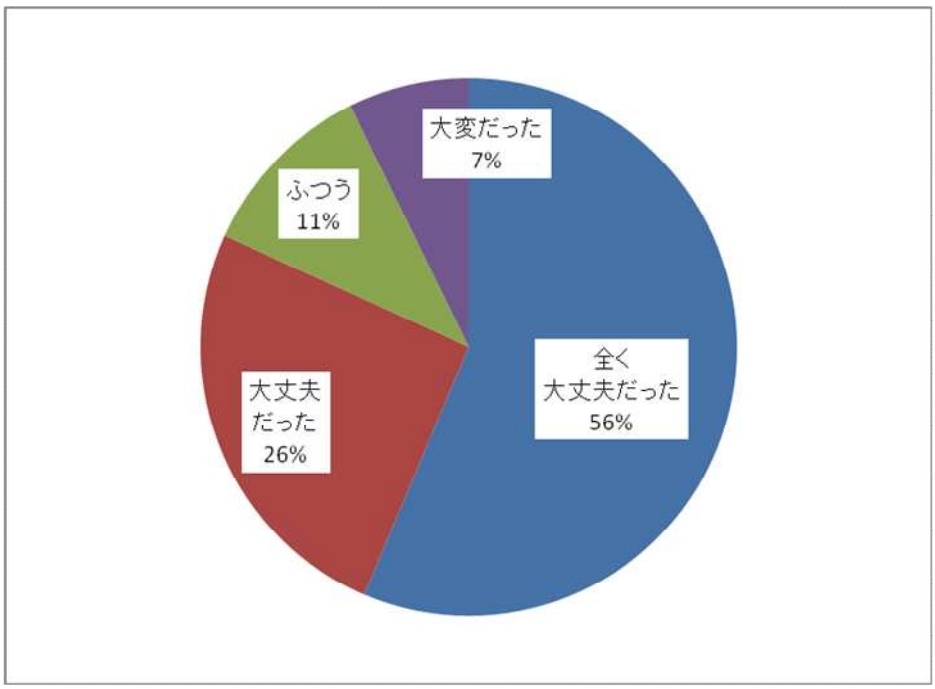
オペレーター有資格者	研修中
１名	９名

【アンケート結果】

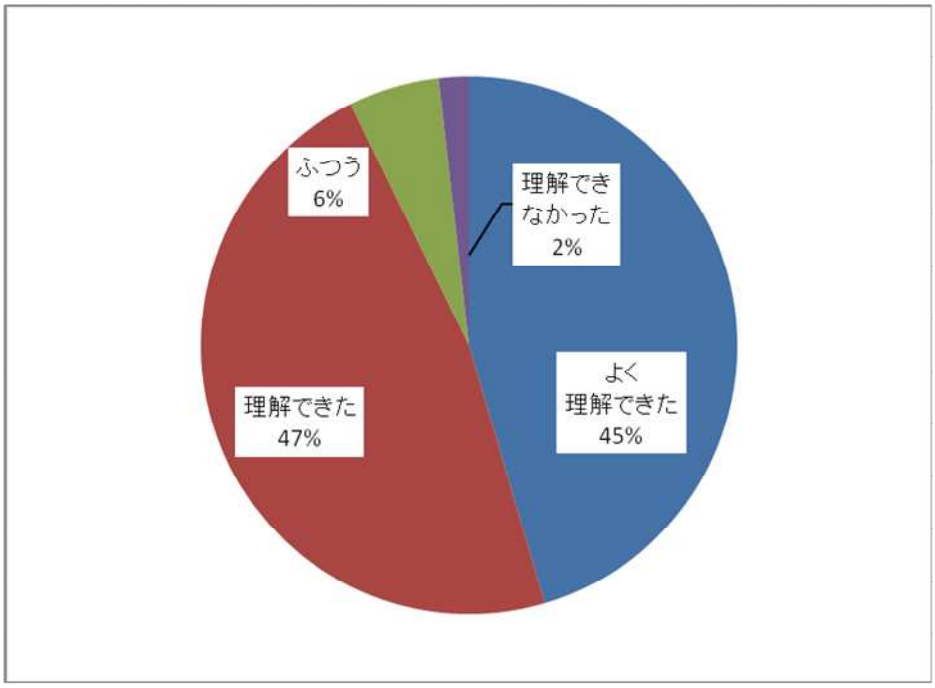
	非常に 楽しくできた	楽しくできた	ふつう	楽しく なかった	全然楽しく なかった	無記入	合計
Q1 楽しくできたか	14	27	14	0	0	0	55



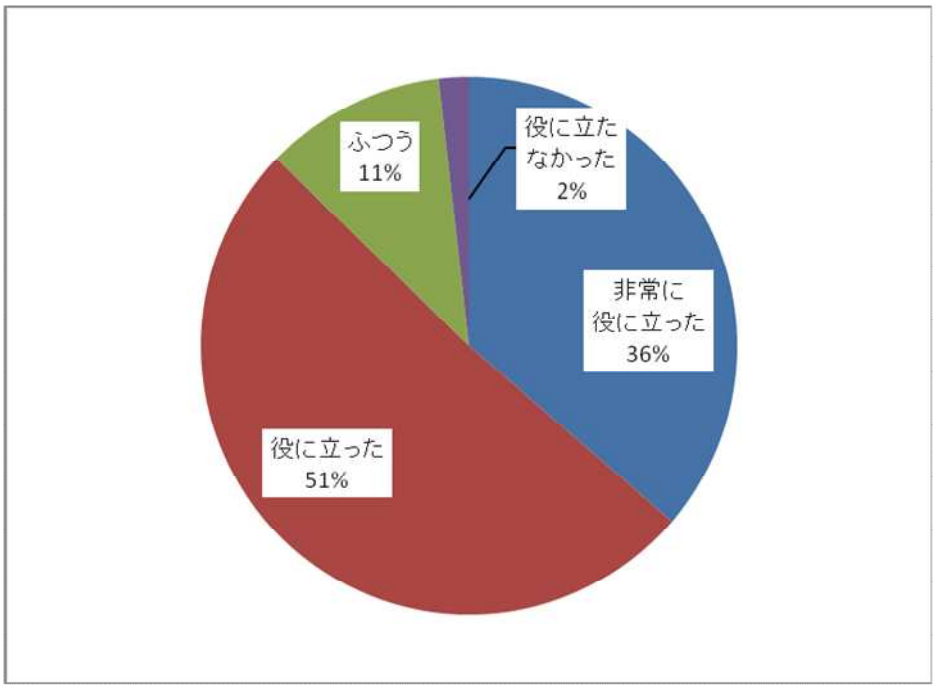
	全く 大丈夫だった	大丈夫 だった	ふつう	大変だった	非常に 大変だった	無記入	合計
Q2 注目させるのが 大変だったか	31	14	6	4	0	0	55



	よく 理解できた	理解できた	ふつう	理解でき なかった	全然理解で きなかった	無記入	合計
Q3 検査の目的や内容は理解できたか	25	26	3	1	0	0	55



	非常に 役に立った	役に立った	ふつう	役に立た なかった	全然役に立 たなかった	無記入	合計
Q4 社会性を理解するのに役立つと感じたか	20	28	6	1	0	0	55



【現状と課題】

検診結果と照合しながら、「かおテレビ」事業実施後のカンファレンスで、課題のある幼児への支援の方法について検討するなど、育児支援について、地域保健課とのさらなる連携が必要である。

【今後の取組・方向性】

1．「かおテレビ」事業実施の拡大

（1）実施場所の拡充

子育て総合センター、こども未来センター、鳴尾地区の１歳６か月健診会場

＜29 年度実施予定＞

会場	回数	定員(各回)
子育て総合センター	５	９
こども未来センター	５	１２
塩瀬公民館	３	１２
山口保健福祉センター	２	１２
鳴尾地区（予定）	未定	未定

（2）対象者の拡充

１歳６か月健診対象以外の受入を行っていくことにより、広く発達に課題のある子供の早期発見に努める。

2．結果の分析と活用

収集したデータをエビデンスとして蓄積し、今後の支援につなげていく検討を大阪大学とともに行う。

3．ペアレント・プログラムの実施（[課題　①　診療待ち期間の短縮]再掲）

子育てに難しさを感じる保護者が子供の行動の理解の仕方を学び、楽しく子育てをする自信をつけることや、子育ての仲間を見つけることを目的として、大阪大学と連携し、実施します。

【対象】３歳児～年長児又は小学生の子供との関わりに不安を感じている保護者
【定員】定員 10 名
【内容】全７回のプログラム（別紙　チラシ参照）

4．要フォロー児への支援

地域保健課所管の育児発達相談（幼児の精神発達のフォロー事業）の療育プログラム向上のため、こども未来センター職員が参画していくなど、対象となる親子への支援体制を充実させていく。

課題　③　計画作成体制の強化

体制強化により申込と新規作成の件数が均衡してきた。
今後、利用状況が安定したケースのモニタリングを外部事業者に移行できるかが課題である。

【28 年度の取組】

１．人員体制の強化

職種	増員数	計
相談支援専門員	２	４

計画相談に係る職員（嘱託）は４名になったが、現在、実働できる相談支援専門の有資格者は１名である。（平成２９年度に２名が資格を取得する予定）

２．計画相談支援

（１）　計画相談のニーズ　　※生活支援課提出資料による

児　童　福　祉　法　分			
障害児通所支援受給者数（a）	計画作成済み人数		達成率（%）b／a
	障害児支援利用計画案作成者(b)	セルフプラン（内数）	
１，２６９人	１．１９７人	５５６人	９４．３%

〈平成２９年３月末現在〉

（２）　こども未来センターでの計画作成利用者数

		２８年度		２９年度（予測）	
		申込	実施	申込	実施
計画作成	新規作成	159	158	0	10
	モニタリング	－	251	－	500
支援会議		－	347	－	
訪問		－	58	－	

【現状と課題】

・モニタリングを順次進めているが、計画作成の新規契約は進んでいない状況である。
・保護者の同意を得た申込み者について、各事業所で計画作成を実施してもらえるよう勧奨しているが、それぞれの事業所の体制が、整わないこともあり、なかなか進行していない。

【今後の取組・方向性】

・有資格者４名体制になった時点で、モニタリングを順次実施すると共に、計画作成の新規契約を進めていく。
・モニタリングの各事業所への委譲についても引き続き検討していく。

課題　④　学齢期の子供に対する支援強化

学齢期の児童・生徒についての相談件数が、昨年度より増加しているが、これはこども未来センターの認知度の向上や、発達支援についての意識の高まりによるものと推定される。この場合、センター内だけでなく、学校園・関係機関との連携の充実が必要と考える。

【28 年度の取組】

１．学校生活支援教室（のびのび教室）

【講師】　稲富 眞彦 氏（関西学院大学教育学部教授）他

【対象】　西宮市立小学校通常学級在籍児童

【開催回数】高学年・低学年　各８回、保護者教室　各１回

【内容】
・ライフスキルの習得（ソーシャルスキルやコーピングスキルなど）
・感情の整理及び心の安定（フォーカシング）
・自己表現の喜び体験と自己肯定感の向上（アートセラピー）

【参加者数】

	のびのび教室			保護者教室		
	低学年	高学年	計	低学年	高学年	計
前期	28	13	41	24	12	36
後期	21	14	35	16	8	24
計	49	27	76	40	20	60

アンケート自由記述から

【低学年】

・自分の気持ちと向き合い、リセットしていくという事が少し上手になっていったように感じる。

・はじめのころは緊張して固まっていたが、2 回、3 回と参加する毎に、慣れて楽しく参加できていた。友達もできて、リーダーの方とも仲良くなれ、のびのび教室を楽しみにしている。

・内容が簡単すぎておもしろくないといって行きたがらなかったことに困っていた。もっと小さい頃は、訳もわからず、療育的なものにも参加してくれていたが、今後は難しくなるな・・と思った。

・初めは面倒そうに来ていたが、慣れてくると行く時間を気にしたり、準備をしたりと変化があった。

・自分がしている事を邪魔されるのをすごく嫌うところがあるのに、一回も誰ともトラブルを起こさなかったところがよかった。

・最初は、まわりの子に緊張していたが、回を重ねるにつれて、よく話すようになったり、教室では普段、なかなか集中できないが、ワークをする中で集中している姿を見ることができた。

【高学年】
・のびのび教室に行けるのが毎週楽しみだったようだ。絵を描くことが好きなので、気分がよくなるのか、帰り道はいつもニコニコだった。親としても毎回考えさせられるものがあり、参加してよかった。3 学期にないのは残念。来年度あれば参加したい。
・最初は初めての所に行くのに抵抗を示していたが、最後となると「もっと行きたい」という言葉が、本人から出てきた。絵で表現することに興味を示し、パソコンのペイント画で月毎の絵を描いている。
・初めはリーダーさんとしか話していなかったが、プログラムの中で他の子供たちと自然に関われるようになり、リラックスして過ごせていた。毎週通うことは少し負担だったが、子供のために時間を作ることで親子で向き合う機会をもてた。
・自分と同じような成長発達の少し似ている友達に会えて、自分だけがこの病気ではないことがわかって良かったようだ。自己肯定感を持てる子供、ひとに迷惑をかけず、協調性のある子供になるよう手助けできたらと思う。
・普段、他人との距離感をうまく取ることができず、うまく自分の意見が言えない時もあったが、のびのび教室では、まわりの友達と仲良くすることができ、楽しく通うことができた。

【保護者教室】
＜低学年＞
・話はよくわかった。でも結局どうすればいいのかわからなくて、その点でまだもやもやした。
・時間が短く、もっとたくさんの事を聞きたかった。何度かに分けて聞けたらよかった。
・自分の子供のこと、障害のことがよくわかり、自分なりに調べていたつもりだったが、目から鱗のようなことがあり、勉強になった。時間が足りなかった
＜高学年＞
・子供のつまずくポイントがよくわかった。中学生についての特徴も聞いてみたかった。
・他の保護者の方と、それぞれの子供たちについて悩みなどを共有する場があるのかなと思っていたので、講義形式の保護者教室のみだったのが残念だった。

２．特別支援教育コーディネータースキルアップ研修

【講師】　和久田 学 氏（子どもの発達科学研究所主席研究員・大阪大学大学院特任講師）
【対象】　西宮市立小中学校教員　１８名
【内容】　社会心理、生命科学、教育支援　24 時間

アンケート自由記述から

・インクルーシブ教育システム構築に向けた新たな課題に対応できる指導力の向上に役立った。特別支援教育コーディネーターの力量アップは、本技のような特別支援学校のセンター的機能の充実にも大切な一助となった。
・専門的かつ実践的な研修により担任だけでなく学校全体としての特別支援教育の推進に役立った。特支の充実は保護者からの声にもあらわれていた。
・研修を受けることで、特別支援教育コーディネーターとしての自覚が高まった。また、専門性を身につけることで保護者の相談に際して的確な助言を行うことができた。特別支援教育推進に関わってリーダーシップを発揮していた。
・コーディネーターとしての自覚が高まり本校の特別支援教育推進に意欲的に取り組んだ。コーディネーターが研修を深める事で専門の知識をもった者として自身を持って保護者や生徒と接したり、職員にもリーダーとして指針を示してくれた事。今年の動きを見てコーディネーターの大切さを実感したものも多くいたはず。専門的な事を一流の講師から教えていただく事がコーディネーター自身毎回楽しみであり、やりがいも感じていたように思う。
・最初の特支コーディネーターということで経験の不足は否めないが研修を通して広く実践的に学ぶことが出来た、本人もコーディネーターとして今後もやって行こうという自身につながっている。研修を深めて次年度の準備にとりかかるなど効果は大きかった。
・校内の特別支援教育推進の中心として学習する機会となっていた。単発の研修ではなく連続 10 回というのも知識を身につけるということでは良かったと思う
・職員会議の後に研修会を実施した。スキルアップ研修の資料をもとにコーディネーターが講師となり伝達講習ができた。実効性のある研修を実施できコーディネーターの役割が確立しつつある。
・本人の感想、報告を聞くにつけ、たいへん有意義で実りの多い研修だったようです。このような内容であればさらに人材育成のために募集枠を広げてもよいかと思います。
・特別支援の校内研修にもスキルアップ研修で得たものを取り入れてもらうことができた。

【現状と課題】

１．学習生活支援教室（のびのび教室）

・参加した保護者の満足度が高く、一定の成果はあると考える。

・ニーズが高いために、回数や内容の充実が必要である。

・北部地区からの参加が難しく、北部教室の実施についても検討課題である。

・保護者同士の交流の場も必要である。

２．特別支援教育コーディネータースキルアップ研修

・推薦した各学校長や、参加者の満足度は高く、継続的な実施が望まれる。

【今後の取組・方向性】

１．学習生活支援教室（のびのび教室）

・実施回数や会場について検討していく。

・実施内容や回数について改善を図り、よりよいものにするよう充実する。

２．特別支援教育コーディネータースキルアップ研修

・受講者が各地域で活躍できる仕組みづくりを考えていく。

課題　⑤　地域・学校園との連携強化

こども未来センターの認知度が高まるなか、さまざまな　連携の取組件数は増加してきている。また、教員向け研修も実施することができた。
今後も、地域や関係機関も含めた連携を強化したい。

【28 年度の取組】

1．人員体制の強化

職種	増員数	計
スクールソーシャルワーカー	1	2

2．学校園へのアウトリーチ

派遣先	派遣回数
保育所	15
幼稚園	64
小学校	293
中学校	119
養護学校	1
関係機関	67
計	559

【活動状況記録】

	校種別　合計					対応区分							
	保育所 幼稚園	小学校	中学校	養護学校	関係機関	家庭環境	問題行動	不登校	発達課題	いじめ	性格	緊急対応	その他
上半期	42	125	36	1	30	19	48	21	106	0	36	2	32
下半期	37	168	83	0	37	61	60	36	172	0	32	16	20
合計	79	293	119	1	67	80	108	57	278	0	68	18	52
学校種別総合計				559		ケース総合計						661	

【現在の状況】

・定期訪問を実施するとともに、依頼訪問に迅速に対応することができた。保育所、幼稚園にも対応する件数が増加した。

・作業療法士、言語聴覚士と連携した支援の充実を図った。

派遣先	派遣回数			
	作業療法士	言語聴覚士	心理療法士	計
幼稚園	０	２	０	２
小学校	５	４	１	１０
ななくさ学園	０	１	０	１
計	５	７	０	１３

【今後の取組・方向性】

・定期訪問の継続とともに、幅広いニーズに対して、セラピストや保育士の訪問回数を増やしていく。学校園の意識改革や取組体制の充実に寄与できるようなアウトリーチを進めていく。